

長崎で暮らす

近年、長崎でも、豊かな自然環境や歴史、文化などに着目して農山漁村地域に移り住む人が見られるようになってきました。

ここでは、外から長崎に移り住んだ人たちが、こうした長崎への定住により地域がどのように変わろうとしているのか、などについて紹介します。

地域振興課 ☎829・1285



長崎市地域おこし協力隊の皆さん (6 ページで紹介)

長崎への定住って、どいんですか？

県外から長崎に移り住んだかたや移住者受け入れに取り組んでいる団体に、話を伺いました

漁業者として野母崎地区に移住した

大戸 起久男（おおと きくお）さん



場で研修を受け、平成23年に独立しました。現在は、小型定置網、一本釣、ウニ・アワビの採取などを行っています。また、仲間の漁業者とともに藻場再生にも取り組んでいます。

大戸さんは漁業について「自然相手の仕事だから大変だけれどもやりがいがある。時間が不規則で体力はいるが、大阪で中間管理職だったときと比べるとストレスは少ない」と語ります。

野母崎での暮らしについて「自然が豊かなのに約1時間で都心に出られるのは、大阪では考えられない。地域のみんなが顔見知りであたたかい人が、

大阪で医療情報技師・診療放射線技師として働いていた大戸さんは、家庭の事情で長崎に移住することになり、せっかくなら自然豊かな土地で子どもたちを育てたいと考えました。

移住前に長崎での仕事を探していたときに野母崎で漁業者に会う機会があり「漁業をやっていくのは難しい」との話があったそうです。大戸さんは、「難しい」と言われたことで逆に漁業に興味を持ち、「漁業をやってみよう」と平成21年に家族で野母崎に移住しました。2年近く国や市の支援により現



外海地区で「空き家バンク」事業に取り組んでいる

NPO法人「NPO太陽が丘そとめ」

外海で、高齢の農家の農産物の出荷の支援をはじめ、まちづくり活動に取り組んでいる

同法人では、昨年4月から本格的に空き家バンク事業に取り組んでいます。



なげました。

「外海では、田舎暮らしをしながら長崎や佐世保まで通勤することができ。デザイナーや陶芸家など手に職を持ち外海で仕事ができる人も歓迎」と語る平宣義理事長。

「仏壇・祭壇があったり盆正月に帰ったりするなどの理由でなかなか紹介物件が増えないのが悩みだが、外海に人が来てもらうことで地域を元気にしたい。家財整理に協力することなどにより、地元でさらに物件の掘り起こしを進めたい」と平理事長は語ってくれました。



平理事長（右）と松岡信道副理事長

同法人の取り組みは、空き家所有者と移住希望者の橋渡し。空き家情報を収集してデータベースを作成し、ホームページ（<http://sotome-akiyabank.com>）などで紹介して、現地への案内も行います（手数料などは無料）。不動産業とは異なり、金銭交渉や契約には関わりません。これまで7件の物件情報を提供し、うち2件の売買と2件の賃貸につ

※空き家バンクに関する問い合わせは
同法人（☎0959・25・0599）
まで。

長崎市の 定住支援策

地域振興課（☎ 829-1285）では、移住を希望されるかたの相談や、空き家・空き地情報の提供などを行っており、これらの取り組みにより、平成 18 年度から平成 26 年度までに 67 人のかたが長崎市へ移住しています。

また、本格的に移住する前に短期間滞在して長崎での暮らしが自分に合っているかどうかを確認する「お試し移住」のために、最大 10 泊 11 日まで利用可能な「交流滞在型宿泊施設」を伊王島地区に 2 棟設置しています。



その他、中長期間の滞在を希望するかた向けの施設を高島・野母崎地区で運営しており、さらに琴海地区にも開設する予定です。琴海地区では、施設を利用する移住希望者と地域の方々との交流の場を設けるなど、移住希望者が安心して地域にとけむことができるようサポートを行う予定です。※琴海地区の滞在施設については、琴海行政センター（☎ 885-2111）にお尋ねください。



また、長崎に移住して漁業や農業を行いたいというかたには、次のようなサポートがあります。

漁業では、就業を希望するかたが漁業者から研修を受ける制度があります。60 歳未満のかたであれば、市の支援事業として、最長で 2 年間、生活費などの助成を受けながら現場で研修を受けることができます。また、独立後も最長 1 年間燃料費などの助成を受けることができます。【問い合わせ：水産振興課（☎ 820-6563）】



農業では、就農するかた（45 歳未満）に対し、営農開始からその経営が安定するまで最長 5 年間助成する青年就農給付金があります。【問い合わせ：農業振興課（☎ 820-6564）】



そのほか、農業センター（☎ 830-1124）や長崎市地産地消振興公社（☎ 892-2824）でも農業研修を行っています（農業センターの研修は 34 ページ参照）。

「多いのがうれしい」と話す大戸さん。移住当初から自治会、青年団、消防団、郷土芸能などの地域活動に参加できるようにして、今では地元のかたから「100 年前から住んでいるようだ」と言われるそうです。



今年度開催している「野母崎エリアの未来を考えるワークショップ」にも参加

地域にもっと住む人が増えるためのポイントなどを尋ねると「空き家が多いが管理されておらず貸す人も少ないので、空き家の活用が重要だ」と思う。都会の人は通勤が 1 時間くらいかかっても気にしないので、まちなかでの就職も含めれば仕事はあまり移住への支障とはならないと思う。一方、野母崎にある小中一貫校、青潮学園は雰囲気良く教育面でもさまざまな取り組みを行っているのにあまり知られていないように思われる。これらも含めてもっと野母崎に住む魅力を知ってもらうといいのではないかと答えて返ってきました。

大戸さんは「地域の共有物である海を仕事場に使っているので、これからも地域の皆さんと一緒に活気ある野母崎にしたい」と語ってくれました。

「NPO 夕陽が丘そとめ」からの空き家紹介により外海に移住したかたに話を伺いました。



東京で働いていましたが、両親が住んでいる長与町に近く五島灘沿岸で海の雰囲気もいい場所に Uターンしようと思いました。ホームページや不動産屋への聞き取りなどで探したのですが、市内の農山漁村地域の物件があまりありませんでした。

そんなとき、「NPO 夕陽が丘そとめ」から築 36 年の空き家を紹介してもらい、購入後リフォームして、昨年 9 月から住んでいます。

台風など風はすごいですが、この家からの眺望はとてもいいです。また、東京に住んでいたときと比べ、ゆったりと過ごせるようになりました。

こちらに来てからは、畑を借りて野菜を育てたりイノシシ防止用の電気柵を設置したりするなど、ちょっとした作業は自分で行うようになりました。

新しい風ー地域おこし協力隊

地域おこし協力隊制度とは、地域外から人材を積極的に受け入れて、地域の活性化や定住を進めようという国の制度です(任期:最大3年間)。長崎市では平成23年度から導入しており、現在、高島、野母崎、伊王島、外海、琴海の5地区で隊員の皆さんが活動中です!



高橋 哲夫 さん
(高島地区)

高島のオススメはきれいな海。人々の地元愛が強く、家におじゃまするとついつい夜遅くまで島での暮らしについて話し込んでしまいます。

高島のおいしい魚や農産物を、高島の中で提供することが大切だと考えています。高島特産のヒラメをおしゃれに食べられるメニューを提案したい

と思い、地元の商店に協力して、しょうゆベースの高島ヒラメ専用カルパッチョソースを開発しました。ソースの材料には高島トマトを使っています。

今後定住するために何ができるか模索中です。「飲食店がいいかも」と思っていますが、島の人を作るごはんの方がおいしいので悩んでいます(笑)。



山本 春菜 さん
(野母崎地区)

さまざまな魚介類があり、磯や浜など海の表情が豊か、オオウナギ、ウミガメの産卵、さらには、伝統的な祭りが多くあること、、、野母崎のいいところをあげるときりがありません。

また、野母崎の人の地元愛がすごく、いろいろなかたから面白情報を教えてもらうことをいつも楽しみにしています。

す。こうした野母崎の面白さを「長崎市地域おこし協力隊」フェイスブックページで情報発信しています。

さらに、自分が持っている造形の技術を使って、野母崎の魅力を図鑑や漫画にしながら、外部の人や地元野母崎の子どもたちに伝えたいと計画しています。



中村 郁夫 さん
(伊王島地区)

市街地から船でわずか20分でリゾート地にたどり着ける伊王島。現在、ホームページ(<http://ioujima.nagasaki.jp/>)やフェイスブックなどを通じて、美しい伊王島を多くの人に紹介しています。

以前、佐賀県武雄市でQRコードを使った多言語での観光案内を製作した

経験を生かして、伊王島でもQRコードを使った観光マップなどを製作し、もっと多くの人に伊王島のことを知ってもらいたいと考えています。

地域に根ざした活動として、花の苗を育てています。小さな活動を地道に積み重ねて、花があふれる伊王島にできればと考えています。



嶋田 純人 さん
(外海地区)

豊かな自然環境と250年にもわたるキリスト教徒の潜伏の歴史がある外海。九州最後の炭鉱があった池島には、他の炭鉱より閉山後の年数が浅いため、炭鉱施設が良好に残されています。こうした外海の魅力をホームページ「そとめぐり」(<http://www.kankosotome.com/>)などで発信しています。

現在、池島では、人が住まなくなった土地に雑草が生い茂るようになったため、イノシシが増えています。私自身もイノシシ捕獲の手伝いをしてはいますが、今後は、草刈りや、草を食べてくれるヤギや牛の導入など、人とイノシシのすみ分けの工夫も必要ではないか、と考えています。



鈴木 飛鳥 さん
(琴海地区)

2月に新しく赴任しましたが、農水産物が豊かで、陸や海の景観が美しい琴海が大好きになりました。

東京で国際協力やフェアトレード(発展途上国との公正な貿易)に取り組むNPO法人で働いていた経験を生かし、地域の皆さんと一緒に、琴海の農水産物の商品化、特産品化に取り組みたい

と考えています。特に、長崎に来た観光客の皆さんに琴海のお土産を買ってもらえたら、と思っています。

これからの琴海の地域おこし活動をどうぞ見守ってください。そして、どうぞご家族、ご友人の皆さんと琴海に遊びに来てください。美しい琴の湖が、皆さんをいつでもお待ちしております。

地域おこし協力隊の卒業生も地域の中で頑張っています!!

野母崎地区の初代協力隊員だった菅原洋樹さんは、平成25年に地域の交流スペースとして、脇岬町で「コミュニティカフェ「リップル」」を開設し、平成26年の任期終了後も引き続き、夫婦でリップルを運営しています。



は、音楽ライブや各種ワークショップなどの催しが開催されるほか、野母崎の将来について地域の人たちが話し合う勉強会も行われています。

野母崎に定住した理由として、「大好きな海があり、気兼ねなく受け入れてくれるところが良かった」と話す菅原さん。「市内にはたくさんの方々があり、バスに1時間乗れば街へ着く。情報や買い物はインターネットである程度補える。たとえ1つの仕事だけでは難しくても複数の仕事を掛け持つことで、生活は可能だ」と話します。



「まちづくり」という大きなことよりも、まちの人が集まってみんな楽しんでほしい」と語る菅原さん。野母崎のこれからの楽しみみです。

琴海地区の初代協力隊員だった平井杏奈さんは、地域の人たちとともに、琴海の農水産物のおいしさを知らせてもらうためのイベント「いなカフェ」を平成25年から年4回開催し、平成27年の任期終了後も続けています。



いなカフェへの出店が、地域で起業したい人たちにとつての試行の場になっています。これまで、いなカフェメンバーから2つのお店（パン屋、カフェ）がオープンしました。

平井さんたちはいなカフェのメンバーは、いなカフェの運営だけでなく、琴海の未来づくりや人材育成などについても話し合っています。



現在、平井さんは、本屋がない琴海に本屋「文化舎クリキンデイ」を夏頃にオープンさせるための準備を進めています。「まずは週末限定など、無理のないペースで始めたいと考えています。本屋を通して、人と人がつながる小さなコミュニティが育つていければ」と、平井さんは将来の目標を語ってくれました。

4月発売の情報誌「ながさきジーン！」でも、地域おこし協力隊と卒業生の皆さんを紹介しています。お楽しみに！

地域が好き

今回の特集で取材した方々の共通点は、この言葉だったと思います。さまざまな経験や考え方を持った方が地域に移り住み、くらしを軌道に乗せるのに苦労しながらも、その地域のことを好きになり、それぞれの視点で地域の良さを掘り起こしていたのが印象的でした。

地域が変わる

外から移住してきた方々が地域での暮らしを好きになっただけを見て、もともと住んでいた地域の人たちもその地域の良さに気付き始めました。外から来た人の視点を取り入れることで、地域への見方が変わっています。

野母崎のコミュニティカフェ「リップル」や琴海の「いなカフェ」なども、地域の中の人と外の人とが交流することで、改めて地域の良さが見直される場となっています。

外からの人を受け入れたり、住んでいる人が地域の外に目を向けたりするようになっていくと、地域の中に元気が生まれます。このような「変化が生まれる」地域には、さらに人が集まり交流が盛んになっていくのではないのでしょうか。

外から地域に移り住む人が「地域にとけこむ」ことはとても大切だと思います。一方、地域も「人を受け入れて変わっていく」ことが活性化のためにも重要なのではないのでしょうか？